幕末維新における新朱王学の展開（Ⅰ）

――並木栗水及び楠本碩水・東沢瀉の史的地位――

望月　高明

あらまし　これから数回にわたって書き続けられる予定の小論は、筆者の「並木栗水研究」の一環をなすものである。そして、「並木栗水研究」は小論の標題が示しているように、更に筆者の「幕末維新における新朱王学の展開」というテーマの一翼を担うものである。並木栗水は、幕末の朱子学者にして著名な攘夷思想家大橋訥庵の衣鉢を継ぐ者である。しかし、その師訥庵の生が優れて政治的であったのとは異なって、栗水は終世僻邑にあってモノローグの形で自己の思想を形成した。由来、栗水を知る者は極めて稀れである。その意味では、栗水はノーマンの表現を借りていえば「忘れられた思想家」である。本稿では栗水とその講友楠本碩水・東沢瀉の生が、世代的には明治の啓蒙思想を担った最初のインテリゲンティア集団明六社同人のそれと全く重なるという事実を指摘して、その比較を試みようとした。ただ、前者が後者と決定的に異なる点は、後者が明治という時代に自己の抱懷する課題を具現化する積極的な展望を見出し得たのに対して、前者はその時代を例外者としての自覚に生きたところにあった。そして、例外者としての自覚に生きた彼等の苦悩に満ちた、しかし真実なるその生涯を後代から振り返ったとき、栗水には栗水の、同様に碩水には碩水の、沢瀉には沢瀉の、独自なる体験的背景が存するのだった。そのような独自なる体験的背景を明らかにすることによって、彼等の生を歴史的に定位しようというのが小論の課題である。行論上、本稿では碩水の生の検討から始めた。

一

A　ねえ君、並木栗水という名前を聞いたことあるかい。

B　えっ、ナ・ミ・キ・リ・ッ・ス・イだって？さあね、聞いたことないなあ、そういう名前は。ところで誰だい、その、ナミキリッスイって。

A　うん、並木栗水は幕末の朱子学者にして著名な攘夷思想家（『闢邪小言』の著者）大橋訥庵の高弟で、その衣鉢を継いだ人なんだ。もっとも、栗水の生は、その師訥庵が晩年、強い危機意識から政治的傾斜を加速させて、公武合体反対・輪王寺宮擁立などの尊王運動に参画し、文久二年（一八六二）の坂下門の変に連座して下獄、出獄後急死（一説には毒殺されたらしい）したという、優れて政治的なものとは極めて対蹠的でね。彼はその生涯を草莽の臣として僻陬に在って、読書講学と育英とに従事したんだ。栗水が没したのは大正三年なんだが、明治以後、急速な近代化に伴って儒教・仏教・神道等の伝統思想はいよいよ断片的性格を強めて凋落したけれど、儒教に限っていえば、旧学を伝えて変わらなかったのは、栗水とその講友楠本碩水・東沢瀉ぐらいなんだ。

B　ということは、リッスイやその講友たちの生は、明治啓蒙思想家――その代表的なイデオローグ福沢諭吉、その他西周・津田真道や加藤弘之……等の生と全く重なるというわけだ。

A　実はそれなんだ……。

B　それにしても、東沢瀉はともかくとして、ナミキリッスイといい、クスモトセキスイといい、余り聞かない名前だね。

今日、並木栗水（一八二八～一九一四）の名前を聞いて、(1) 彼が「只今都下ニ而道徳性命の学第一者大橋順蔵ニ而可有之」（楠本端山の評）と、幕末の思想界にその偉才を謳われた代表的な朱子学者大橋訥庵の高弟としてその衣鉢を継いだ思想家であること――その成果は、直接には訥庵の未完の遺作『周易私断』を訂正増補してこれを続成した労作『増補周易私断』（十一巻）として結晶している――、(2) 幕末から明治にかけて、北総香取郡久賀村（現千葉県香取郡多古町）に在って私塾蛟蛉塾を主宰し、講学と郷党子弟の育英とに従事して、その門下から幾多の人材を輩出したこと、[1] (3) 栗水が明治十八年に著した『朱陸太極問答合編』（写本）に対して、その講友、崎門学派の朱子学者楠本碩水（一八三三～一九一六）と陽明学者東沢瀉（一八三二～一八九一）とが応答して、三者の間で朱子学と陸王学の性格規定・評価、あるいはその基本的範疇の定義をめぐって論争が繰り広げられたが、それは明治時代のわが国の宋明学の水準を卜する試金石としての地位を占めているとともに、その論争は文字通り、日本儒学史の掉尾を飾る偉観というも過言ではないこと、(4) あるいは、弱冠以来、朱子学に従事して聖賢の真伝とまで篤く信じて、事実、著述等によってその学を祖述してきた栗水が、多年『周易』に沈潜した結果、朱子学に対して大疑を抱き、その晩年、齢七十を越えて『宋学源流質疑』（三巻）を著して自己の学説に大幅な修正を加えて朱子学離れを演じたこと……等々を知るものは、よほどの専家に限られるであろう。その意味において、栗水はE・H・ノーマンの著書の標題を借りるならば「忘れられた思想家」だといってよい。しかも狩野亨吉によって見出される以前の安藤昌益とは異なって、栗水の遺著のいくつかはいまだ写本で伝えられているにしても、その主著である『宋学源流質疑』（明治三六年十二月刊）はその生前に、同じく『増補周易私断』（大正七年九月刊）も、栗水の没後数年して上梓されているにもかかわらず（もっとも、前者は非売品であること、後者もまたその書の性格からいって少部数が印刷に付されて、流通範囲が限られていたことは想像に難くない）。上述のごとく、栗水が没したのは大正三年である。このように時代はなお近く、栗水の著作原稿、親筆の書簡類など多数残っているにもかかわらず、寡聞にして栗水を主題的に扱った著書は固より、伝記や論文すらあることを聞かぬ。それにしても、栗水がしかく顧みられないのは何故であろうか。それは栗水の奉ずる朱子学がその歴史的役割を――それがいかに巨大だったとはいえ――既に終えて空疎なものと化し終わり、新時代の異質的な思想と断乎として対決するような原理として機能し得なかったからであろうか。あるいは、栗水の思想とはけっきょく歴史的に破産した一つの――固より有力な――学派の中に埋没して、飽くまで「学」や「思想」の体系性や構造性に固執し、理屈合わせの観念的遊戯に耽ったにすぎない底のものであったということであろうか。例えば『大橋訥菴先生伝』の著者寺田剛氏（同氏は『大橋訥菴先生伝』を上梓した後、その師平泉澄氏とともに『大橋訥菴先生全集』（上・中・下巻）を編纂している）は、その七章「門人録」の中で栗水に数行を割いて、「晩年朱子の説を疑ひ宋学源流質疑を著したが、論は取るに足りぬ」と一刀両断に付している。それは同氏が訥庵の学術について

かくて日本人大橋訥菴先生は、よく日本人としての自覚の上に立ち、援くるに純乎たる朱子学を以てし、こゝに正学を興起し、名分を明らかにするを以て己が任となし、綱常を千万世に扶植するに到ったものである。（『大橋訥菴先生伝』）

と評しているのと比べて、何と対蹠的であろうか。とはいえ、栗水の論（思想的・学術的価値）がしかく言うように「取るに足りぬ」か否かは、栗水の著書・遺文に直接ついて改めて検討が加えられなければならない。

碩水晩年の講友内田遠湖は、碩水の遺編『朱王合編』に序して、その中で佐藤一斎の学術に触れて、学界の泰斗として経学文章ともに一世に名望があったが、朱子学と陽明学を兼修したその折衷的な学風は、朱王いずれも深く造ったものとはいい難く、その課題は彼の門人たちに委ねられた。続けて、一斎は幕末昌平黌の儒官として幾多の人材を養成したが、一斎門下の傑出した者がそれぞれその得るところに従って一家を成し、東西に分処した結果、朱学・王学ともに盛行するという現象を出来した。わけても朱子学者としては大橋訥庵（一八一六～一八六二）・小

笠原敬斎（一八二八～一八六三）・楠本端山（一八二八～一八八三）・並木栗水等が、陽明学者としては吉村秋陽（一七九七～一八六六）・春日潜庵（一八一一～一八七八）・池田草庵（一八一三～一八七八）・東沢瀉等がその尤なるものであった、と述べている。すなわち、

本邦近世朱学の盛んなるは、寛政に若くは莫し。三博士已に逝き、王学漸く盛んなり。是の時に方り、一斎佐藤氏、経学文章を以て一世に名あり、而して其の学は則ち朱王を兼取す。余を以て之を視るに、両者並びに未だ深く造らざるなり。然れども門人甚だ衆し。其の傑出する者、各〻得る所を以て家を成し、東西に分処して、朱学王学並び行わる。其の朱学を為むる者に、大橋訥庵・小笠原敬斎・楠本端山・並木栗水等有り。王学を為むる者に、吉村秋陽・春日潜庵・池田草庵・東沢瀉等有り。皆な真実の心を以て、義理の学を治め、相共に商量し討論して、以て帰する所を定む。之を当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者に視ぶるに、其の識見気象、迥然として別有り。斯の編を観て知るべし。（『朱王合編』）

「朱王合編序」に名前のあがっている者のうち、吉村秋陽・大橋訥庵・楠本端山・小笠原敬斎・東沢瀉は、その若き日にそれぞれ一定期間一斎の許に従学してその講筵に列し、直接師承関係を有する。わけても、秋陽と訥庵の両者は、朱王兼取という一斎の学風の両方向をそれぞれ深化させた一斎門下の双璧だといってよい。池田草庵は秋陽や訥庵等のように一斎と直接師承関係があるというのではないが、彼もまた嘉永四年（一八五一、三十九歳）に、「名賢の蘊蔵を叩いて、以て独学固陋の病を医す」（草庵と行を共にした愛甥池田盛之助の表現）目的で、江戸に一斎を訪問している。なお、草庵が一斎に面晤するに際して呈示した「見佐藤一斎書」（『草庵文集』中、なお、同書簡は『朱王合編』三にも収載する）には、一斎訪問の動機・目的が詳しい。春日潜庵と一斎との間には、秋陽や訥庵のような直接的な師承関係は固より、講友草庵のような間接的な師承関係も見出すことはできない。潜庵の一斎との関係は、数度の（？）書簡の往復（『潜庵遺稿』二に「与佐藤一斎翁書」を収録する。なお、同書簡は『朱王合編』三にも収載する）と、嘉永六年（一八五三）七月、将軍家慶の喪にあたり、潜庵は久我家納経使として江戸行きを命ぜられ、事終わりて一斎と二度面晤したのがすべてである。以上の事実は、潜庵が自己の陽明学を形成するに当たって、一斎と直接師承関係のあった上記門人たちとは異なって、一斎の強力な磁場、羈絆の及ばない潜庵独自の体験的背景が存していることを示唆する。なお、栗水と一斎の関係については、彼の師訥庵が一斎の高足であるということ以外、両者を直接結びつける資料は見出し得ない。端山・敬斎・栗水・沢瀉等は、秋陽・訥庵・潜庵・草庵等の世代よりは一世代若いグループに属しており、一部の例外を除いて両者は直接的あるいは間接的にそれぞれ師承関係にある（なお、便宜上、前者をAグループ、後者をBグループと称する）。例えば端山はその『端山自著年譜』嘉永五年壬子二十五歳条に、「大橋訥庵を得て日〻斯の学を講究す。訥庵は学甚だ邃く行甚だ高し。余慨然として歎じて曰く、「此の人に逢わずんば、殆んど一生を虚過せしならん」と。是に於いて一往して返らず、奮励して力を用ゆ」と記している。これは端山が平戸藩の「特命」によって江戸に赴き、一斎の門に従学したときのことで、当時訥庵の人格が端山において通常の教師以上のいかに絶対的な存在であったかを物語っている。ともあれ、われわれはここではひとまず、幕末維新における朱王学者の錚々たる者に伍して栗水の名前があがっていることに注目すれば足りる。

もっとも、遠湖が一斎以後の朱王学の錚々たる者として彼等の名前を特筆しているのは、そのオリジンをいえば、碩水原輯に係る『朱王合編』（原名は『朱紫合編』であるが、刊行するに当たって遠湖と碩水の高弟岡直養とが協議して現行のごとく改めた）の精神を忠実に反映させたものといえるかも知れない。事実、このことは『朱王合編』四巻の構成に如実に表れている。碩水が『朱王合編』の巻首に一斎の行状（佐藤槐撰「皇考故儒員佐藤府君行状」）を収録したのは、一斎の幕末思想界において占める地位というものを語っている。すなわち、彼が幕末昌平黌の儒官として幾多の人材を養成し、学界の泰斗として仰がれたからであろうが、同時にまた巻二以下に展開されているような幕末の一斎以後の朱学・王学盛行の起因するところが、一斎の学術に源流するとの認識に基

づくのではないかと思われる（なお、以上の結論は遠湖の序文の趣旨に忠実に従ったというにすぎず、当然別の理解の仕方があって然るべきである）。以下、巻二は秋陽が陽明学の立場に立って祖述し、「日ごろの功夫の大略はここに具わる」と自負したところの『格致臆議』をめぐって、同門の訥庵との間に催起した論争に関係する論学書を中心に構成されている。巻三はAグループの中、互いに陽明学という一本の屈強の線（良知の学の血脈）によって固く結ばれていた（秋陽）・潜庵・草庵及び林良斎の往復書簡から成っている。巻三には十二篇の資料を収録するが、その半数の六篇が草庵の編著『鳴鶴相和集』からの引用である。「鳴鶴相和」という『周易』中孚に由来する美しい表現が示唆しているように、草庵の学は文運隆盛なる活潑な知的運動の中心地江戸から遠く隔たった僻陬の地に在って、一種のモノローグの形で形成せられた。そして、このことはひとり草庵に限らず、陽明学者に限っていえば、上記草庵の講友たちはいずれも僻遠の地に在って一種のモノローグの形で自己の学問を形成した人たちであった。草庵が自らの離群索居の心を慰めるために、秋陽・良斎・潜庵・そして自身の往復書簡十四篇を集めて編んだ『鳴鶴相和集』の跋文には、彼等のそうした心事が最もよく表われている。

嗚乎、茫々たる宇宙、読書講学、其の人何ぞ限りあらん。大率記誦に非ざれば、則ち詞章。其の間一も稍〻性命の微に志す者有り。宛も陰に在る鶴の如く、離群索居すること亦た已に甚だし。然り而して至誠の感ずる所、天下自ずから之に応ずる者無くんばあらず。山陽（秋陽）と山陰（草庵）と、南海（良斎）と京畿（潜庵）と、道塗の隔遠数百千里なるも、志応じ神通じ、彼倡え此れ和すること、啻に母子の親のみにあらざるなり。余深く此の学の孤ならざるを喜ぶ。（跋鳴鶴相和集）

なお、草庵の「跋鳴鶴相和集」の後半は、図らずも幕末期における陽明学者の分布図のような観を呈している（このことについては後述）。林良斎（一八〇七～一八四九）は賛岐多度津の陽明学者。良斎はその若き日に大塩中斎の許に短期間ではあったが従学した経験を有するが、このことは良斎の陽明学の性格を規定する上で決定的な出来事であった。

そして、巻四にはBグループの学者、すなわち端山・吉村斐山・栗水・沢瀉・碩水の往復書簡等を収める。なお、直養は『朱王合編』刊行にあたり、主として碩水その人に関わる資料八篇を補足し（その中には小笠原敬斎の書簡一通を含む）、かつ本書所収に関わる碑伝を附録として加えた。吉村斐山（一八二二～一八八二）は秋陽の養嗣子。斐山は秋陽なきあと、その家学を継承発展させたといわれる。なお、同門の沢瀉はその「故安芸文学斐山吉村君碑銘」（『沢瀉先生全集』下、沢瀉文約）において、秋陽から斐山へ継承された家学の相承を、伊藤仁斎・東涯父子の関係に擬している。遠湖が「朱王合編序」に良斎と斐山の名前を逸したのは、単に煩を厭うたまでで、簡略に従ったにすぎない。良斎と斐山の両者が、同様に一斎後の幕末朱王学者の錚々たる者であることは固より言うまでもない。また、碩水は自分の編著に自身の往復論学書三篇を収録しているが、このことは自身が上記朱王学者と同じ課題に生きた精神的同時代人であるという強烈な自覚の表明であることは、改めて喋々するまでもない。

なお、碩水の次の文はAグループの中、陽明学者に限ってではあるけれど、一斎以後における彼等の史的地位というものを明らかにしていて、甚だ興味深い。

先生（秋陽を指す）は壮年にして、先師佐藤一斎氏に従い、始めて姚江の説を聞く。鑽研已に久しくして、遂に一世の泰斗と為る。当時姚江の学を講ずる者、京に源潜庵有り、讃に林良斎有り、但に池田草庵有り。皆な能く卓然として一方に雄峙せり。然れども或いは景逸・念台の間に出入し、少か夾雑無きこと能わず。先生は則ち一意尊信、純然確守して、他説を雑えず。故に其の見る所の明、造る所の深は、三子者の比に非ず。其の平生自警する所に三有り。曰く、訓詁の陋に落ちず。門戸の見を立てず。知解の精に頼らず。又た功夫三説有り。曰く、動上に静を求む。動静一致。用功は静より入る。此れ以て其の姚江の真伝を得るを見るべし。（『碩水余稿』一、読我書楼記）

私はかつて別の小論（「池田草庵と楠本端山（Ⅰ）―幕末新朱王学の葛藤―」）において、上の文が明治十六年以降に執筆せられたことに触れた後、続けてこの碩水の陽明学者四子の史的評価は、彼等の現実が、す

なわち彼等がその末期に生を受けたところの江戸時代の歴史・文化・学問……等々がその形成過程を完了して自らを完成し終わった、その最後のところから顧りみて定位したものという意義を担っていることを指摘した。日本の朱子学が総じて学派として一まとめに扱うことを可能にするそれなりの根拠を有している（その顕著な例として、例えば山崎闇斎を領袖とする崎門学派を見よ）のに比べると、日本の陽明学は学派としてのまとまり、持続性に乏しく、概して散発的に陽明学を奉ずる者が出現し、その思索体験も中国のそれとは異なって、小ぢんまりと各人各様の議論を述懐するに止どまって、思想運動として実社会に一大旋風を捲き起こすまでには至らなかったといわれる。かく見来たると、上の文で碩水が指摘しているような事態、すなわち一斎以後の幕末の思想界において、安芸に秋陽が、京都に潜庵が、讃岐に良斎が、そして但馬に草庵が在って、四者がそれぞれ旗幟を鮮明にし、陽明学を奉じて鼎立の形勢にあったという事実は、日本の陽明学史上において、その現象面だけを取り上げても非常に注目すべき事態だといわなければならない（もっとも、良斎は一斎に先だつこと十年、嘉永二年（一八四九）に没しているから、厳密にいえばこういういい方は修正されなければならない）。ここで再び、前に引いた草庵の「跋鳴鶴相和集」を思い起こそう。碩水の「読我書楼記」と草庵の「跋鳴鶴相和集」とを比較したとき、両者はほとんど同じ事態を指摘しながら、畢竟、後者の表現はほとんど詩に近づいている。当然のことではあるが、後者にはいまだ前者が企図しているような、ある特定の思想家の生、その地歩を歴史上に定位するといった冷厳かつ合理主義的な視点は貫徹せられていない。従って、草庵が「山陽と山陰と、南海と京畿と、道塗の隔遠数百千里」というとき、それは文字通り地理学的な、空間的な意味しか表わしていない。

ところで、碩水の言でもう一つ注目すべきは、秋陽を除いて、潜庵・良斎・草庵の三者の陽明学が、原陽明学に止どまらないで、それを超えて陽明門下あるいは陽明を通過した明末新陽明学派の有力な思想家高景逸、あるいは朱子学を通過した明末新朱子学派の有力な思想家劉念台等の思想を受容することによって形成せられているという指摘である（もっとも、ここに限っていえば碩水の文言は、彼等が陽明学者として自己の思想を形成するに当たって明末の新朱王学者景逸・念台等の折衷的思想を受容したことは、思想の純粋性を損なうという事態を結果したとして負の評価を下しているのであるが）。そして、実はかかる朱王折衷的な傾向は彼等に止どまらないで、濃淡厚薄の相違はあるにせよ、江戸末期に出た優れた学者の幾人かについては、朱子学に傾斜するか、陽明学に傾斜するか、その志向は異なるにせよ、教学の枠を超えた共通の底流となっていたのである。

ここで再び「朱王合編序」に立ち返って、遠湖が（従って、むしろ勝義には碩水が）一斎以後の優れた学者の幾人かとして、Aグループ及びBグループの学者の名前をあげている理由について考えてみよう。遠湖の企図（従って碩水のそれ）は、現代の日本思想史家がその思想的・政治的、あるいは経済的な問題意識から、佐久間象山・横井小楠・吉田松陰、あるいは福沢諭吉……等々にアプローチするのとは、異質の価値観や人間観・歴史観に基づいて幕末維新の学術史を再構成しようとしたものである。そして、その理由の一斑は既に上掲の遠湖の序文の中に非常に簡潔な形で示されているといってよい。すなわち、「……皆な真実の心を以て、義理の学を治め、相共に商量し討論して、以て帰する所を定む。之を当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者に視ぶるに、其の識見気象、迥然として別有り。斯の編を観て知るべし」とあるのが、それである。しかし、その中心部分は原文にしてわずか十文字程度にすぎず、それ自体は極めて簡潔な表現のために（あるいは透明なインクで書かれていて、文字と文字の間に多くの伏せ字があるといってもいい）、色々な解釈を容れる余地が存して、不安定なのを免れない。われわれの上の問いは、それに真実に答えるためにはある循環を避けることができない。遠湖が「斯の編（『朱王合編』を指す）を観て知るべし」というごとく、恐らくそれはわれわれが彼等の個々の著作に沈潜し、それによって喚起せられ、それの間接に指示するところを自己との対話に持ち来たし、それが一の主題として結晶化するのをひたすら待ち続けるような作業を必要とするであろう。従って、われわれは早急に結論を求めて、遠湖の表現

を取り来たっていかにも尤もらしく言挙げするのは慎んで、ひとまず彼等の著作の語りかける声に耳を傾け、それの指示するところを表現に上せることを通して、そのことが自ずと明らかになるように努力しなければならない。

なお、上掲の遠湖の序文には、Aグループ・Bグループの学者に対照して、空疎な訓詁詞章の学に憂き身をやつしている彼等と同時代の幕末期の儒者に言及しているが、ここでは「当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者」（当時儒士専攻訓詁詞章者）という表現に伏在している問題について考察するとしよう。ところで、この一続きの表現を、便宜的にそれぞれ「当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者」・「当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者」とアクセントをつけることによって、二つの意味が含蓄せられていることに気づくであろう。その一つ（前者）は歴史的概念としてであり、他の一つ（後者）は幕末という状況において出来したところの特殊的概念としてである。歴史的概念というのは、彼等の奉ずる宋学の一つの特色は、それが成立する当初において、経書古典の文字を金科玉条とするいわゆる訓詁記誦の立場の克服ということが前提せられていたことを指す。宋人がそれを「俗儒の記誦詞章の習い」（朱子「大学章句序」）として排斥した根拠は、その立場はまた必然的に功利を本質とする外面的な学修と化した科挙の学との結合という事態を結果し、知識欲や功利心を満足させることはできても、けっきょく人間の心性の問題には何らの解決をも与え得ぬという最も単純な事実であった。遠湖が序文で用いている「義理の学」という表現は、ここでは宋学（宋明学）をかかる外面的な知識、事功尊重の立場から判然と弁別する標徴（メルクマール）としての意義を担っている。そして、「当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者」と表現することにおいて、彼等が嫡々と宋学以来の伝統を相承しているという自覚を表わしている。

一方、特殊的概念というのは、上来述べた伝統的概念に伏在しながら、幕末という在来の諸体系が崩壊し始めた歴史的状況において顕在化した事態をここでは象徴的に表わしている。上来の文脈に即していえば、「当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者」という表現において、明初の朱子学者胡敬斎の表現を借りるならば、宛ら「世俗浮華の習いに惑溺し、虚誕の文を作って利禄を干（もと）め、草率の詩を作って時寵を取る」というごとき江戸末期の儒者の現実を直指していることは、想像に難くない。もっとも、上の遠湖の表現が、具体的には幕末期の儒者の中、どの学派の、誰（誰たち）の、いかなる現実を指してかく言っているのか、私にはこの表現を十分に肉付けして理解するだけの知識が欠けていることを、率直に告白しなければならない。あるいは「訓詁詞章」という言葉の有する意味を拡張して解釈することが許されるならば、彼等の同時代の諸他の儒者の現実に対する批判も、これと同じ基調の上に立つものと見なしてよいかも知れない。

御承知之通、米夷入港以来、天下之形勢一変致候故、都下は猶更にて、儒生も過半は縫掖を捨て蛮学者に相成、猫も杓子も西洋々々と申候斗にて、道義之事抔商量致候様之者、半個も見当り不申候。（『幕末維新朱子学者書簡集』二九頁～三〇頁、訥庵の草庵宛書簡、以下、朱子書と略記する）

康斎読書学問ハ格別不足称候得共、貧困上堅苦之工夫ヲ下し、躬行シて諸生ト苦楽ヲ共ニシ、一介不取之節操ヲ守リ候ハ、其風采真ニ可仰事ニ候。当時儒先生ト称スル者、動（やや）もスレハ諸生ト利ヲ争ヒ、暗中収斂之術ヲ施シ、利金ヲ貸シ、田地ヲ求メ、子孫之計ヲナシ、俗人ニモ劣候事不少。右等之人ヲシテ此日録ヲ読マセ候ハヽ、如何可有之哉。嘸（さぞ）汗顔之事ト奉存候。今日善学康斎者有幾人哉。（同上、一九一頁、碩水の草庵宛書簡）

初めに前者から述べる。訥庵が「米夷入港以来、天下之形勢一変致候」といっているのは、決して誇張でも何でもない。日本の近代史を後代から俯観したとき、確かに嘉永六年（一八五三）のアメリカ艦隊の来航という事件を境にして、以前と以後とでは風景は一変する。このことは、単に産業や技術や法律等の制度的機構の側面においてのみ現われたのではない。思想的領域においてもまたその急速な進行が現われた。訥庵の書簡には、アメリカ艦隊来航による大きな衝撃を契機として、当時における思想の第一次的な担い手であった儒者の大半が、「猫も杓子も」昨日

まで自己を全領していた思想や基本的範疇を弊履のごとく捨てて洋学へと大量転向していったという思想界の総雪崩現象が痛憤慨嘆せられている。訥庵の有名な「近年洋学流行、神州の元気を損傷致候を憤激の余り、自己の固陋をも不顧闢邪小言草定仕候。折柄癸丑（嘉永六年）の六月夷船渡来……」（『大橋訥菴先生全集』下、宮川嘉兵衛宛書簡）という表現は、『闢邪小言』の執筆の動機を語るとともに、時勢に対する訥庵の心事を最もよく表わしている。

次に後者について述べる。康斎は明代初期の先駆的思想家呉与弼のこと（康斎はその号）。その門下から婁一斎・陳白沙・胡敬斎等の大儒を輩出する。康斎の学はその弟子敬斎と比較すると、同じく朱子学を奉ずるとはいえ、かなり陸学の臭味を持っているといわれる。康斎は国子司業（国立大学副学長）呉溥の子として生まれたが、十九歳の時に『伊洛淵源録』、わけても宋儒程明道の「猟心」の話柄と遭遇することを機縁として、これまで自己の生を全領していた科挙の受験勉強を断然と放擲して、全く新たなる生存の次元を選び取った。端的にいえば、明学は官学から勃興せずして民服をまとった処士康斎から発した。因みに草庵の学問風趣は、訥庵をはじめ、そのスクールから「康斎の流亜」（『朱子書』一八〇頁）と目されていた。また、碩水は「呉康斎は貧困中より涵養し出で来たり、鳳の千仞を翔けるの気象有り。予、明儒中に於いて、尤も其の人と為りに服せり」（『碩水先生遺書』九）と述べて、康斎の人格に対する傾倒の念を率直に告白している。康斎の史的評価をめぐって、草庵と碩水の両者の間で集中して書簡が往復しているが、わが国ではこの二人によって康斎の真の意義が開顕せられた。康斎の主著、「一人の史」なるその丹念な『日録』は、碩水の努力によって草庵の序文を付して元治元年（一八六四）に刊行された。ともあれ、碩水の書簡では、貧困に喘ぎながら聖賢を目指して真実な生き方を求めて悲荘な精進を続ける康斎の清貧な生と、それとは極めて対蹠的な碩水の眼に映じた同時代の儒者の赤裸々な現実とが鋭く対比せられている。その俗物性は、「当時儒先生ト称スル者……」以下の一文によって白日の下に曝されている。

以上、遠湖の用いている「訓詁詞章」という言葉の有する意味を拡張して解釈し、訥庵及び碩水の同時代の儒者の現実に対する忌憚のない批判を見てきた。[2] 上来、特殊的概念をめぐって色々と言ったが、これを要するに、私がここで主張したいことは次の二つである。その一つは、遠湖の「当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者」という表現において、他ならぬ江戸時代末期に、言語文字の末節に拘泥する記誦詞誦の習いは固より、また礼楽制度の攻究と訓詁考証を特色とする煩瑣な文献学、あるいは源頭上の功夫を欠いた理念抜きの功業優先を説く事功の学、その他……等々といった幕末期の儒者の滔々と皆是れなりという状況が現出した事実の指摘と、そしてかかる状況の現出が告発されていることである。しかし、このことは見易い。私がここで力一ぱい主張したいこととは次の一事にほかならない。すなわち、「当時の儒士の専ら訓詁詞章を攻むる者」という表現には、恐らく遠湖の意図を超えて、幕末における儒者の滔々と皆是れなりという状況それ自身が、正統教学としてその時代の思想的覇権を握っていた体系が解体しはじめるのに伴って、その強力な磁場によって階序的に構成せられ秩序づけられていたもろもろの学問・文芸・芸能、その他……等々が解放されて、その自律性を求めて自己の存在を主張しはじめるに至った傾向と密接に照応していること、これである。なお、このことに私が示唆を受けたのは、藤田省三氏の「松陰の精神史的意味に関する一考察――或る「吉田松陰文集」の書目選定理由――」を読む過程においてであった。同氏の次の一文はこの問題に対して非常に透徹した論理で省察を加えているので、同氏の文を引くことによってわれわれの結論に代えることとする。

基礎的な、或は初歩的な「事実」への注目が方法的に特に問題になってくるのは、在来の諸体系が崩壊し始めた時である。なぜなら、学問や理論や体系というものは必ず一定の前提をもってその上にだけ成立することの出来るものであって、無前提に――すなわち無条件に――妥当性を主張することの出来る体系的なるものは何一つ無いのであり、そうして体系的なるものの崩壊とは他ならぬその前提条件が成り立ち得なくなった事を意味するのであって、その時に始めて人は前提無しに存在している裸の「事実」そのものに立ち返ろうとするからな

のである。在来の諸体系が崩壊し始める時に「考証学」や「好事家」的傾向が世の人々を風靡するに至る所以はそこにある。（藤田省三著作集5『精神史的考察』）

二

これから述べることは私の単なる覚え書にすぎず、組織立ったまとまったものではない。ことにすぐ後に述べる明治啓蒙思想家に対する十分な知識を欠いていることは、甚だ遺憾である。従って、その結論らしきものといっても、そんなことは分かりきったことではないかといわれれば、それはそうだが、それにもかかわらず、このことの発見は私にとってやはり一つの驚きであった。"発見"などとずい分大仰な物言いだが、いうところの発見とは、上記Bグループの朱王学者は世代的には、明治の啓蒙思想を担った最初の近代的思想集団であった明六社同人と、一部の例外を除いてほとんど重なるという事実である。明治七年二月「明六社制規」を定め、機関誌『明六雑誌』を刊行し、明六社が正式に発足した当初のメンバー十人[3]のうち、森有礼・箕作麟祥（みつくり）を除くそれ以外の同人は、「おおむね一八二〇年代の後半から一八三〇年代の半ばに生まれており、嘉永六年（一八五三）のペリー来航前後に青年期を迎え、明治元年（一八六八）には三十代から四〇歳初めという働き盛りの年齢に達している」（植手通有氏後掲論文）。以上述べたことは、Bグループの学者についても全く同じ事態を指摘することができる。ただ、Bグループの学者が明六者同人と決定的に異なっている点は、後述するごとく、前者が明治という時代に自己の課題を具現化する積極的な展望を見出し得たのとは対蹠的に、後者は自己の現実に対して断念し、その時代を例外者（もっとも、それがいかなる意味であるかが明らかにされなければならないが）としての自覚に生きたところにある。（このように双方のグループについて、単に世代論的な比較に止どまらないで、その他の事項のいくつかについてその異同の比較を試みることは興味のある問題ではあるが、ここでは立入ることはできない）。なお、明六者同人の没年は一定していないが（注3参照）、同人の多くは明治三十年代まで生を保ち、例えば加藤弘之や杉享二のように大正時代まで生き長らえた同人もいる。従って、小論の副題に沿って便宜上、以下の考察ではBグループの学者については、明六者同人の活動時期と重なる明治二十四年まで存命した沢瀉を下限として、それより長く存命した栗水・碩水の三人の生を主たる対象として進めることにする。このように、Bグループの学者と明六社同人とは全く同じ時代を生きながら、歴史の判決が衰えるものと栄えるものとをきっぱりと区別した後代から彼等の生を回顧したとき、彼等の辿った足跡は何と対蹠的であろうか。そして、両者の生の分岐点となるものは、明六社同人のほとんどが、はじめ儒学を修め、その後に洋学に転じたという学問上の経歴を有するのに対して、Bグループの学者は自己の奉ずる儒学（宋明学）とその基本的範疇に始めから終わりまで頑固に固着し続けたところにあった。明六者の同人はそのすぐれた洋学に対する専門的知識・技術によって、幕末にはほとんどが幕臣として幕府の洋学機関または翻訳方に勤めていたが、維新後は明治新政府の官僚へと転身している（その中で福沢諭吉は周知のごとく、維新後は新政府からの再三の招請にもかかわらず、敢えて官途に就こうとせず、在野の思想家として通したが、その政治的立場は明治政府に対して親和的であった）。そして、彼等は自己の抱懐する課題を実現する場、自己の活躍する新天地を明治という時代に見出し、またそれ故に明治時代の思想的チャンピオンとしての地位を勝ち得たともいえる。

明六社はその名前の通り、明治六年に組織された最初の近代的思想集団であった。一口に明治時代の思想といっても、明治以前のわが国の伝統思想と、明治以後流入したヨーロッパ思想との交渉・葛藤・妥協・折衷の実験の場としての明治という時代の性格は、しかく言うほど単純ではない。ともあれ、明治時代の早い時期に明六社のようなインテリゲンティア集団が組織されて、そこに集った当時第一級の洋学者たちがジャーナリスティックなテーマに止どまらず、高度にアカデミックなテーマについて思索し、寄稿し、論戦したということは、明治という時代、あるいはその社会を形成する上で決定的な影響を与えた。それは明

治という時代、その社会を指導して、その時代・その社会の性格を非常に深いところにおいて規定しているのではないだろうか。その意味において、明六社同人は明治時代の思想史的領域において、それを指導しているような一種の leading idea を形成する地位を担ったといえないであろうか。

植手通有氏はその論文「明治啓蒙思想の形成とその脆弱性」において、明六社の啓蒙思想家と明治維新を推進し実質的権力を握った実際政治家とを比較して、両者のその時代において果たした役割、その占める地位を次のように位置づけている。やや長文にわたるけれど、啓蒙思想家の生を位置づけることは、彼等と全く同時代を生きたBグループの学者のそれと対照させる上で避けて通れない作業なので、煩を厭わず引用することとする。

しかし、後者が非合理的な政治的観念に身をまかせ、いたずらに手足をばたばたさせる実際行動に狂奔していた間に、前者は政治的実践からは身をひき、新しい学問に沈潜することによって、その後における日本の進路を模索していたのである。すなわち、政治的実践家がなお攘夷の観念にとりつかれ、西洋的なものの排撃に熱中していたときに、啓蒙思想家は近代的な国際観念を身につけ、開国と国際的相互交流の必要を考えていた。また実践家がなお名分論的な尊王の観念に身をまかせ、「君側の奸」の排斥に憂身をやつしていたときに、思想家は個人の自由と平等とを基礎とした近代国家の必然性を思い描いていた。そうして、啓蒙思想家のそうした構想は、大筋の方向としてみれば、その後の過程において、政治的実践家によって現実化される。この意味では、彼らは、現実における政治的活動から自からを隔離することによって、逆にその後の歴史の動向に決定的な影響を与えた、ということもできよう。(『日本近代思想の形成』)

この場合、上の植手氏の啓蒙思想家の生の位置づけは、鏡に譬えられるであろう。しかも、その鏡には予め細工が施してあって、啓蒙思想家の生の態様に形取って形像を映し出すとしよう。Bグループの学者がその鏡を覗き込んで自己の姿（生）を映し出したとき、その鏡には自己のいかなる部分が映し出されて、いかなる部分が映し出されないか、このことが明らかにされない限り、両者の生の対蹠性といっても、いまだそれは明瞭性を欠いたものといわねばならぬ。従って、そのことの解明がわれわれの次の課題でなければならぬ。もっとも、栗水とは異なって、碩水と沢瀉については先人の努力によってそれぞれ全集[4]が編まれており、また詳細な伝記等が既にあって、彼等の生涯をひと通り辿るのにはさして困難は感じられない。事態かくのごときだとすれば、彼等の人生行路を機械的に辿ることは、いわば屋下に屋を架する底の謗りを逸れないであろう。従って、彼等の生涯を回顧するといったとき、それは彼等の生を画期するような出来事を中心に叙述されなければならない。

初めに碩水の生について述べる。明治二十二年四月に、碩水が講友栗水に宛てた書簡には、碩水自身の生活や家計の状態が明けすけに語られていて、当時の碩水の一面を知る上でも非常に興味深い。明治二十二年といえば、碩水は五十八歳である。

弟年三十九之時京師より帰候処、家禄も新ニ賜リ候得共従前ノ家禄ハ佐々氏ニ帰シ、弟ハ復姓後別ニ世襲禄ヲ賜フ直ニ奉還仕候間名ハ奉還ナレ共実ハ擲棄ナリ赤貧孑立十余年、其後先伯父之後ヲ承クベキ議起リ再三辞避スレトモ、弟ヨリ外ニ嗣クベキモノナキヲ以テ許サレズ。不得已シテ其祭ヲ奉シ田園地価千七百円分配ニ与リ、今日ハ先ツ不自由と申訳ニモ無御坐候。尤一家倹勤二字ヲ守リ水田ハ一切耕シ不申候得共、畑ハ近辺ニテ野菜麦作等致居、一婢一僕共ニ六七口相暮居申候。且養蚕も少々ハ仕居、木綿ハ勿論、絹も手織ニ而相用ヒ申候。然シ次第租税ハ増シ米価ハ低落、且種々不得已之費用も有之、今日ニ而ハ四五百円も負債ヲ生シ実ハ極貧同様之事ニ御坐候。斯ル瑣細之事実ハ愧入候得共、任御懇意乍序申上候。(『朱子書』一三七頁～一三八頁、便宜上、以下この文をS書簡と称する)

碩水がS書簡の劈頭に「弟年三十九之時……」とわざわざ自己の年齢を明記しているのは、やはり意味深いことだといわねばならない。何となれば、それは、三十九歳という年齢が自己の生を前後に画するような重大な意義を持つものであったことを、碩水自身が深く自覚していたこと

を物語るものでなくてはならないから。碩水の三十九歳といえば、明治三年である。嘉永六年のアメリカ艦隊の来航から、慶応三年（一八六七）の幕府倒壊、明治維新へと展開する十数年間は、実にわが国未曽有の激しい変動と波瀾の時期であった。この十数年の政治過程は、二百数十年来の幕藩体制の最後のドラマが展開されるとともに、近代日本が誕生する陣痛の苦しみを味わう時期でもある。それは時代にとっても、また個人にとっても、ともにのっぴきならぬ決定的な時期であった。ドイツの著名な歴史家ランケは、「各々の時代は直接神に属する」（世界史概観）と述べて、歴史上の各時代がそれ自身として固有の存在意義を持ち、われわれの認識の対象となるという意味のことをいったが、ランケのこの言葉を自由に解釈することが許されるならば、このことは歴史上に生きる人間の個々の存在についても同様の事態を指摘することができるのではないだろうか。すなわち、この十数年間の激動の歴史過程は、上は天皇あるいは封建諸侯から、下は市井に生きる無名の誰の何兵衛に至るまで、一人一人がその時代の経験の跡を止どめているといってよい。しかし、碩水にはやはり彼自身の独自なる体験的背景があったといわねばならない。そして、S書簡はそのことを端的に物語るものとして理解せられねばならない。もっとも、S書簡の自身の体験を語っている部分は非常に簡潔な形で表現されていて（傍点の個所）、その消息は十分に明らかであるとは決していい難い。比喩的に譬えていうならば、それはいまだ単にその骨骼のみを示したに止どまって、肉体を欠いている。従って、以下の叙述ではその骨骼に肉体を纏わせるための作業が、すなわち碩水の生の画期をなす三十九歳までの前半生の履歴がひとまず顧みられなければならない。なお、碩水の伝記資料としては、碩水自身によって死の直前まで書き継がれた『碩水先生日記』があって、彼の生涯の履歴を辿るためには不可欠な資料である。また、端山の嗣楠本海山の「碩水先生伝」は、碩水の生涯と学術とについて簡勁な筆致で叙した非常な力作である。従って、以下の叙述では「碩水先生日記」を経とし、「碩水先生伝」を緯として、間々その他の資料を雑揉して碩水の生涯を織り成すように努力しよう。

碩水は天保三年（一八三三）一月、平戸藩士楠本養斎（馬廻役、俸禄三十五石）の第三子として針尾島（現長崎県佐世保市針尾）に生まれた（兄端山はその長子である）。弘化二年（一八四五）二月、平戸藩学維新館に入る。同年八月、父の命によって維新館教授佐々鵲巣の養子となる。このことは後年、父養斎公の死を契機として矛盾が表面化し、また碩水の朱子学、わけても崎門学に対する自覚の深まりとともに彼の前に漸次思想的課題として立ちはだかり、その思想的解決を迫って彼を「復姓」という行為へと駆り立てることになる。S書簡の割注の「従前ノ家禄ハ佐々氏ニ帰シ、弟ハ復姓後別ニ世襲禄ヲ賜フ」というのがそれで、爾来二十年余にわたって佐々家の俸禄を襲いだ碩水が、三十九歳を一期として楠本姓に復したことを指す。本姓に復すれば、従来の佐々家の家禄から全く離れて、楠本家の部屋住みの身となるのである。割注の後半は、復姓後無禄となった碩水が、多年の功績により藩主松浦静山侯から世襲禄二十五石を賜ったことを指す。弘化四年（一八四七）、十六歳となった碩水は、その三月に元服の式を挙げ、名を孚嘉、字を吉甫と命名された。そして、その十二月維新館学員に補せられ、翌年（嘉永元年）九月、九州遊学の途についた。その期間は断続的に前後八年に及んだが、豊後日田の広瀬淡窓、佐賀の草場佩川、肥後の木下韡村の門にはそれぞれ一定期間従学した。後年、碩水は彼等からは得るところがなかったことを率直に告白している。なお、碩水は遊学中にその他筑前秋月の吉田平陽、肥後の横井小楠・沢村西陂・月田蒙斎等の九州在住の著名な儒者を歴訪して問学した。中でも蒙斎との遭遇は碩水の生涯においてただ一度限りであったが、このときの面会――後年、碩水は蒙斎との面会が安政元年（一八五四）一月十二日であったことを、繰り返し語っている――がその後の六十年の碩水の生涯を決定した。この日の出来事は、一生涯忘れることのできない懐しい思い出として碩水の脳裏に深く刻印された。「安政甲寅、余熊本に遊び、路して長洲に過りて、月田蒙斎翁を訪う。談話一夕、翁其の随筆を出だして示さる。即ち正月十二日なり。爾後再び相見ゆるを得ず。因りて此れを賦して以て其の概を記す。蓋し随筆は翁平日猥りに人に示さずと云う」という序を付した一詩（『碩水先生遺書』

四）は、そのことを雄弁に物語っている。なお、後年碩水は長文の「月田蒙斎伝」（同七）及び蒙斎の遺書『蒙斎随筆』二巻（明治二十六年刊）、『蒙斎先生詩集』（明治二十七年刊）を上梓して、蒙斎の顕彰に努めた。

安政二年（一八五五）、碩水は熊本の遊学から帰ると、この七月維新館句読師に任ぜられ、翌三年九月には維新館助教に任ぜられた。安政五年（一八五八）十一月、兄端山がそうであったように藩命で江戸の一斎の許に遊学した。一斎はこの時既に八十七歳の高齢であったため（一斎は碩水が江戸遊学中の安政六年（一八五九）九月二十四日に没している。なお、碩水は一斎の発症から逝去までの模様、あるいは一斎の学事や身辺の雑事について見聞したところを記録した「先師佐藤一斎先生遺事」（『碩水先生余稿』一）を残している）、碩水が実際に教えを受けたのは一斎門下の高足からであった。碩水の江戸滞在は一年有半に及んだが、その間に訥庵の思誠塾では定期的に『近思録』の講義を聴き、また『大学』の輪講にも出席した。若山勿堂の塾では『周易啓蒙』及び『周易』の講義を聴いた。碩水の兄端山にとって、訥庵の人格が通常の教師以上の絶対的な意義を持っていたことは既に述べた。その縁故もあって、碩水が他の教師以上に訥庵の許をしばしば訪問して教えを請うたことは想像に難くない。しかし、碩水から見ると訥庵の日常にはとかく遺憾なところがないでもなかった（なお、訥庵の過失のうち、その顕著なもの二つ――一つは訥庵が安政の大獄で刑死した頼三樹三郎の遺屍を収葬したことの失、他の一つは、訥庵が一斎没後五ヶ月にもならぬうちに河田迪斎の未亡人及び綎女（ともに一斎の女）を伴って猿若町に観劇に行ったことの失――について碩水はその率直な性情から、そのつど歯に衣着せぬ忌憚のない書簡を訥庵の許に送ったが、訥庵の懇切を極めた返書二通が『幕末維新朱子学者書簡集』大橋訥庵書簡に収録されている）。このことと関連して、碩水は一斎の門人中で、一斎家に来た諸儒の幾人かについて、主としてその外貌の特徴を記している。そして、訥庵については「陣太刀拵ノ佩刀デ三斎羽織ニ自在袴デ、ハデナ様子ハ大橋訥庵デアツタゾ。サレドモ丈ノ卑ク近眼デアツタカラ、威望ハマンザラナカツタゾ」（『過庭余聞』）と形容している。このことは私の単なる主観的な印象にすぎないが、訥庵には善かれ悪しかれ、われわれが今日「儒者」という言葉によって通常想定しがちなようなイメージには収まりきらない、そうした儒家矩矱や類型によっては把らえきれずに溢出するもの、余剰というものがあって、それが訥庵という人物を捉えにくくさせている一因であり、また、強く人を惹き付ける魅力ともなっているのではないかと思われる（この人に常に付きまとっている毀と誉、褒と貶と相半ばする両価的（アンビバレント）な評価は、このことを強く示唆する）。私は上の碩水の文を、訥庵についてそのような理解の途を開くものとして解釈することができると思う。

明治から大正期の歴史学者久米邦武は、文久三年（一八六三）に佐賀藩の留学生として江戸に出て昌平黌に学んだが、当時の寄宿生の生活ぶりを次のように記している。

才人志士は、外出すると有名な人物に紹介を求めて訪問し、面会し、談論をし、遊学の主要目的は課程よりは大家先生の訪問にあり、読書よりも名士の談話によって学問は進むものとし……た。（R・P・ドーア『江戸時代の教育』所引、なお、同文は『久米博士九十年回顧談』上巻に載せるも未見）

江戸滞在中の碩水が事実、講義や読書をおろそかにして、名士や大家先生の訪問に明け暮れしたかは知らない。試みに碩水が安政五年十一月三十日に一斎の門に入ってから、安政七年（万延元年）四月二日に江戸を出立するまでの一年有半の『碩水先生日記』の当該記事を読む者は、碩水についても大同小異、いかにもさもあったろうとの感を禁じ得ないであろう。こうして、碩水は江戸滞在中、思誠塾・勿堂塾で講義を聴くかたわら、一斎門下の諸先輩を訪ね、あるいは同学と交わって切磋琢磨に努めた。上記二人の他、朝川寿太郎、一斎の嗣佐藤立軒、新宮士敬（肥後人吉藩士）、小笠原敬斎、大沼沈山、渋谷得蔵……等々の儒者や文人と交わった。中でも小笠原敬斎とは一見して知己をもって相許し、交際が最も親密であった。敬斎の人となりについて、後年、碩水は次のように述べている。

源敬斎、胸中灑然にして、冰壺秋月の如し。富貴功名、毫も念に入ら

ず。而して善を聞けば則ち遷り、義を見れば則ち勇なり。余嘗て之が伝を為りて曰く、「平生事を論じ物を処するには、必ず義理を弁別するを以て先と為す、而して義の在る所之を為せり。水の壑に赴くが如し。其の義に非ざるや、千駟万馬も視ざるなり」と。乃ち実事実語なり。（『碩水先生遺書』十一）

敬斎ハ豪邁ナ人デアツテ、俗気ト云フモノハチツトモナイ。胸中ガ洗ヒ上ゲタヤウヂヤ。経説ハ深クハナイ。詩文モ鍛錬ガスクナイゾ。話ノ間ニ人モナニトナウ俗気ノナイヤウニナツタコトゾ。（『過庭余聞』）

敬斎の学のアウトラインを知るには、端山の「敬斎公子履歴聞見畧歴」（『端山先生遺書』四）が便利である。それによれば、端山と敬斎は嘉永四年に一斎の塾で知り合いとなり、その後親交を結んで互いに論学した。当時、敬斎の学は甚だ博雑で、別に一派の学宗というものはなかったらしい。気象豪邁で、小節に拘わらぬ風があった。端山・士敬・川田履道（伊予大洲藩士）等の同門とよく相会して学を論じたが、始めは旧見を墨守していたために、彼等と講論が嚙み合わなかった。端山等の論難によって、やがて幡然と初志を翻した。端山の西帰後、訥庵の許に入門して正学を講究し、始めて程朱学を宗とするに至った。しかし、端山よりすれば、敬斎の学はいまだ純正なものではなかった。その後、敬斎は士敬・履道と論学したが、前者は程朱学を、後者は陽明学をそれぞれ主としていて、議論が嚙み合わなかった。端山の「此の間数〻書を後覚（端山の名）に寄す。議論明確にして、純ら程朱の学を奉ず」という表現によって、敬斎の学が上来の欠点を漸次克服して、精透なものになっていったことが伺えるであろう。なお、敬斎がその晩年、月田蒙斎の学を慕い従遊の意志を持っていたこと、蒙斎もまた敬斎に深く望みを嘱したことを指摘しておくのは、意味なしとしないであろう。碩水は後に実に三五〇〇余字に及ぶ長文の「小笠原敬斎君伝」（『碩水先生遺書』七）を撰して、有為の才を抱きながら志半ばにして早逝した友人の行跡と人物を表彰して、これを後に伝えた。敬斎の遺書には『新策弁』二巻、『強国要義』四巻、『擎天管語』一巻、及び詩文稿若干巻が存するという。

附記　小論は何よりも先ず、私に並木栗水の研究を慫慂して下さった故岡田武彦先生、並びに栗水の貴重な資料の閲覧貸与をはじめ、種々研究の便宜を図って下さった故米本重信先生のお二人に示されねばならぬ。このことは実に今から二〇年程前に遡るのであるが、愚かな私がその期間を無為に過ごしている間に、両先生はともに鬼籍に入られてしまった。私は両先生の罪人といわねばならぬ。私の「並木栗水研究」はようやく緒に就いたにすぎない。今後、愚鈍に鞭打ち一層精進を重ねて両先生との約束を果たしたいと思う。

注

(1) 及門の徒、才俊少なからず。寺島直（大審院判事）、鈴木隆、林泰輔（文学博士）、土屋秀立、川田鷹夫、大橋義三（訥庵の実子）、菊池三郎、松平良郎、五十嵐敬止（貴族院議員）、菅澤重雄（衆議院議員 貴族院議員）等のごときは、最も世に著れた人たちである。

(2) 本稿では触れることができなかったけれど、Aグループ・Bグループの学者が用いている「功利腸」という言葉において、彼等が直指しようとした現実、あるいはその言葉において表現しようとしたその独得のニュアンスを明らかにすることは、この問題について有力な手がかりを与えるであろう。

(3) 明六社発足当初のメンバーは次の十名である。すなわち、西村茂樹（一八二八～一九〇二）、津田真道（一八二九～一九〇三）、西周（一八二九～一八九七）、中村正直（一八三三～一八九一）、加藤弘之（一八三六～一九一六）、箕作秋坪（一八二五～一八八六）、福沢諭吉（一八三四～一九〇一）、杉享二（一八二八～一九一七）箕作麟祥（一八四六～一八九七）、森有礼（一八四七～一八八九）。

(4) 碩水については、岡田武彦・荒木見悟先生等九州大学中国哲学研究室の教官の編集によって、『楠本碩水全集』全一巻が昭和五十五年に刊行された。また、沢瀉については、夙に沢瀉の嗣子東敬治が中心になって大正八年、『沢瀉先生全集』上下二巻、一八七八頁の堂々たる大冊が沢瀉会から刊行された。

（平成十八年九月二十九日受理）